

マネット医師の静かな住居は、ソホー広場から遠からぬ閑静な街の一画にあった。四月という月日の波があつた叛逆の公判の上を乗り越えてしまつて、公衆の興味と記憶ということから言えば、それを遠く海の方へ押し流してしまつていた頃の、ある天気の良い日曜日の午後、ジャーヴィス・ロリー氏は、自分の住んでいるクラークンウェルから出かけて、医師と食事を共にしに行く途中、日当りのいい街々を歩いて行つた。ロリー氏は、何度か事務上の事だけに専念することにした後に、結局医師の友人になつてしまつたのだ。そしてその閑静な街の一画は彼の生活の中の日当りのいい部分となつた。

その天気の良い日曜日に、ロリー氏は、午後早く、習慣上の三つの理由で、ソホーの方へ歩いて行つたのだ。第一に、天気の良い日曜日には、彼は晚餐の前に医師とリューシーと一緒に散歩に出かけることがたびたびあつたからだし、第二に、都合のよくない日曜日には、彼は家族の友人として彼等と一緒にいて、話をしたり、読書をしたり、窓の外を眺めたり、漫然とその日を過したりする習慣であつたからだし、第三に、彼は自分の解かねばならないちよつとしたむずかしい疑問を持つていたのだが、医師の家庭の習わしから考えて、その時がそれを解くに好適な時だということを知つていたからであつた。

医師の住んでいるその一画ほど風変りな一画は、ロンドン中にも見出せそうになかつた。

マネット医師の静かな住居は、ソホー広場から遠からぬ閑静な街の一面にあった。四月という月日の波があゝ叛逆罪の公判の上を乗り越えてしまつて、公衆の興味と記憶ということから言えば、それを遠く海の方へ押し流してしまつていた頃の、ある天気の良い日曜日の午後、ジャーヴィス・ロリー氏は、自分の住んでいるクラークンウェルから出かけて、医師と食事を共にしに行く途中、日当りのいい街々を歩いて行つた。ロリー氏は、何度か事務上の事だけに専念することにした後に、結局医師の友人になつてしまつたのだつた。そしてその閑静な街の一面は彼の生活の中の日当りのいい部分となつた。

その天気の良い日曜日に、ロリー氏は、午後早く、習慣上の三つの理由で、ソホーの方へ歩いていたので。第一に、天気の良い日曜日には、彼は晚餐の前に医師とリューシーと一緒に散歩に出かけることがたびたびあつたからだし、第二に、都合のよくない日曜日には、彼は家族の友人として彼等と一緒にいて、話をしたり、読書をしたり、窓の外を眺めたり、漫然とその日を過したりする習慣であつたからだし、第三に、彼は自分の解かねばならないちよつとしたむずかしい疑問を持つていたのだが、医師の家庭の習わしから考えて、その時がそれを解くに好適な時だということを知つていたからであつた。

医師の住んでいるその一面ほど風変りな一面は、ロンドン中にも見出せそうになかつた。

ディーニュの司教邸は、施療院の隣にあった。

司教邸は広大な美しい家で、シモールの修道院長で一七一二年にディーニュの司教となったパリイ大学神学博士アンリ・ピュジェー閣下によって、十八世紀のはじめに建てられた石造のものだった。全く堂々たる住宅であった。すべてに壮大な面影があった、司教の居間、客間、奥の間、古いフロレンス式どおりに^{せりもぞろ}迫持揃いのある歩廊を持った広い中庭、りっぱな樹木が植えてある後園など。第一階にあつて後園に面した、長いみごとな回廊をなしている食堂には、アンリ・ピュジェー閣下が一七一四年七月二十九日に、アンブロンの大司教公爵シャール・ブリューラル・ド・ジャンリー閣下、カピュサン派の牧師でグラスの司教アントヌ・ド・メダリニー閣下、マルタ騎士団の騎士でサン・トノレ・ド・レランの修道院長フィリップ・ド・ヴァンドーム閣下、ヴァンスの司教男爵フランソア・ド・ベルトン・ド・グリヨン閣下、グランデーヴの司教領主シェザール・ド・サブラン・ド・フォルカキエ閣下、およびスネーの司教領主にしてオラトアール派の牧師で王の常任説教師なるジャン・ソーナン閣下を、正式の食堂に招待したことがあった。これら主客七人の高貴な人々の肖像が、その室を飾っていた。そしてその一七、一四年七月二十九日の記念すべき日付は、真つ白な大理石の板に金文字で彫つてあつた。

施療院は、狭い低い二階建ての建物で、小さな庭が一つあるきりだった。

ディーニュの司教邸は、施療院の隣にあった。

司教邸は広大な美しい家で、シモールの修道院長で一七二二年にディーニュの司教となったパリイ大学神学博士アンリ・ピュジェー閣下によって、十八世紀のはじめに建てられた石造のものだった。全く堂々たる住宅であった。すべてに壮大な面影があった、司教の居間、客間、奥の間、古いフロレンス式どおりに^{せりもぞろ}迫持揃いのある歩廊を持った広い中庭、りっぱな樹木が植えてある後園など。第一階にあつて後園に面した、長いみごとな回廊をなしている食堂には、アンリ・ピュジェー閣下が一七二四年七月二十九日に、アンブロンの大司教公爵シャール・ブリューラル・ド・ジャンリー閣下、カピュサン派の牧師でグラスの司教アントヌ・ド・メダリニー閣下、マルタ騎士団の騎士でサン・トノレ・ド・レランの修道院長フィリップ・ド・ヴァンドーム閣下、ヴァンスの司教男爵フランソア・ド・ベルトン・ド・グリヨン閣下、グランデーヴの司教領主シエザール・ド・サブラン・ド・フォルカキエ閣下、およびスネーの司教領主にしてオラトアール派の牧師で王の常任説教師なるジャン・ソーナン閣下を、正式の食堂に招待したことがあった。これら主客七人の高貴な人々の肖像が、その室を飾っていた。そしてその一七二四年七月二十九日の記念すべき日付は、真つ白な大理石の板に金文字で彫つてあつた。

施療院は、狭い低い二階建ての建物で、小さな庭が一つあるきりだった。

「ワトソン君、僕は行かなきゃならないんだがね」

ある朝、一緒に食事をしている時にホームズがいった。

「行くなってどこへ？」

「ダートムアだ——キングス・パイランドだ」

私は格別おどろきもしなかった。事実、私は、今全イングランドの噂の種になっているこの驚くべき事件に、ホームズが関係しないということをむしろ不思議にさえ思っていたのである。前の日、ホームズは終日眉根をよせた顔を首垂れて、強い黒煙草をパイプにつめかえつめかえ部屋の中を歩き廻ってばかりいて、私が何を話しかけても何を訊ねても石のように黙りこくっていた。あらゆる新聞の新しい版が出るごとに、いちいち配達所から届けられたが、それすらちよっと眼を通すだけに部屋の隅へ投げすてた。しかも、彼が一言も口をきかないにも拘らず、彼の頭脳の中で考えられていることは、私にはよく分っていた。いま彼の推理力と太刀打ちの出来る問題といえはただ一つ、ウェセックス賞杯争覇戦出場の名馬の奇怪なる失踪と、その調馬師の惨殺された事件があるのみだ。だから彼が突然、その悲劇の現場へ行くといいい出したことは、私にとっては予期していたことでありまた希望していたことでもあったのだ。

「差支えがなければ僕も行ってみたいんだがね」と、私は

いった。

「君に来てもらえれば大変有難いんだが。この事件は極めて特異なものだと思われる節があるから、君にしたって行くことはまんざらむだにはなるまいと思う。今からパディントン停車場へ行けば、ちょうど汽車の時間にいいだろう。委しいことは途々話すとして、すまないが君のあの上等の双眼鏡を持って来てくれたまえ」

それから一時間あまりの後には、私はエクスタ行の一等車の一隅に腰かけていた。シャーロック・ホームズは耳垂れつきの旅行用ハンチングを被った顔を緊張させて、パディントンで新らたに買った新聞に忙しそうに眼を通していった。そしてリイディングをずっと過ぎた頃、彼はそれ等の新聞をまとめて座席の下へ突込み、シガー・ケースを取出して私にもすすめた。

「至極順調に走ってるようだね」

ホームズは窓の外を眺めながらそういった。そして時計を出して見て、

「今ちょうど速力は一時間五十三哩半だ」

「四分の一哩標が見えなかったようだ」

と、私はいった。

「僕はそんなものは見やしないよ、だが、この線路の電柱は六十ヤードごとに立ってるのだから計算は極めて簡単に

「ワトソン君、僕は行かなきゃならないんだがね」

ある朝、一緒に食事をしている時にホームズがいった。

「行くなってどこへ？」

「ダートムアだ——キングス・パイランドだ」

私は格別おどろきもしなかった。事実、私は、今全イングランドの噂の種になっているこの驚くべき事件に、ホームズが関係しないということをむしろ不思議にさえ思っていたのである。前の日、ホームズは終日眉根をよせた顔を首垂れて、強い黒煙草をパイプにつめかえつめかえ部屋の中を歩き廻ってばかりいて、私が何を話しかけても何を訊ねても石のように黙りこくっていた。あらゆる新聞の新しい版が出るごとに、いちいち配達所から届けられたが、それすらちよつと眼を通すだけですぐに部屋の隅へ投げ捨てた。しかも、彼が一言も口をきかないにも拘らず、彼の頭脳の中で考えられていることは、私にはよく分っていた。いま彼の推理力と太刀打ちの出来る問題といえはただ一つ、ウェセックス賞杯争覇戦出場の名馬の奇怪なる失踪と、その調馬師の惨殺された事件があるのみだ。だから彼が突然その悲劇の現場へ行くといひ出したことは、私にとっては予期していたことでありまた希望していたことでもあったのだ。

「差支えがなければ僕も行ってみたいんだがね」と、私は

いった。

「君に来てもらえれば大変有難いんだが。この事件は極めて特異なものだと思われる節があるから、君にしたって行くことはまんざらむだにはなるまいと思う。今からパディントン停車場へ行けば、ちょうど汽車の時間にいいだろう。委しいことは途々話すとして、すまないが君のあの上等の双眼鏡を持って来てくれたまえ」

それから一時間あまりの後には、私はエクスタ行の一等車の一隅に腰かけていた。シャーロック・ホームズは耳垂れつきの旅行用ハンチングを被った顔を緊張させて、パディントンで新らたに買った新聞に忙しそうに眼を通していった。そしてリイディングをずっと過ぎた頃、彼はそれ等の新聞をまとめて座席の下へ突込み、シガー・ケースを取出して私にもすすめた。

「至極順調に走ってるようだね」

ホームズは窓の外を眺めながらそういった。そして時計を出して見て、

「今ちょうど速力は一時間五十三哩半だ」

「四分の一哩標が見えなかったようだが」

と、私はいった。

「僕はそんなものは見やしないよ、だが、この線路の電柱は六十ヤードごとに立ってるのだから計算は極めて簡単に

本も時代によって、さまざまな風俗を成す。前述したように本はいつもその時代の趣味好尚を映じ出している。即ち、僧俗時代、貴族時代、そうした時代の本はやはりそうした時代を明示する姿を以て遺されている。燦爛たる光耀を伴うような、神への尊崇と神への敬順を具象化したような宝玉や金属で飾られた寺院本、紋章や唐草や絡み模様などでけんらんと装われた貴族蔵本などは自ら過剰な、華飾的な此等の生活と風俗を具えている。蓋し当然事である。印刷術の発明、大量化以来、本は、甚だその働き場を拡大された。私蔵装飾本は、本のうちの甚だ少数なる一部となった。そして大多数は公刊装本によるものが規準となった。現代に於ては、本も甚だ多衆的なアンチームな姿を以て世紀を縦断している。この現代である。所で日本の現在、本はどんな姿をしているか。改めていうまでもないが、一応は述べなければならぬことだ。日本はその過去の本に於ては、西洋本と甚だ異なる綴本装幀をもっている。巻物形式までは略同様であったが、綴本形式になってからはまるで変った形式となった。即ち袋綴じであって、截口が綴る方にある、西洋の逆態である。西洋と東洋とは、いろいろなものが逆であるが、本もその例を如実に示している。表紙を本文に綴じ合せる方法は西洋では早く姿を没したが、日本ではそれが、洋風装本の渡来までそのまま存続していた。チョン髻と同様である。この和風綴本、これは現在もむろん存在する。数から云つても、教科書類のこの方式のものを加えたら、

本も時代によって、さまざまな風俗を成す。前述したように本はいつもその時代の趣味好尚を映じ出している。即ち、僧俗時代、貴族時代、そうした時代の本はやはりそうした時代を明示する姿を以て遺されている。燦爛たる光耀を伴うような、神への尊崇と神への敬順を具象化したような宝玉や金属で飾られた寺院本、紋章や唐草や絡み模様などでけんらんと装われた貴族蔵本などは自ら過剰な、華飾的な此等の生活と風俗を具えている。蓋し当然事である。印刷術の発明、大量化以来、本は、甚だその働き場を拡大された。私蔵装飾本は、本のうちの甚だ少数なる一部となった。そして大多数は公刊装本によるものが規準となった。現代に於ては、本も甚だ多衆的なアンチームな姿を以て世紀を縦断している。この現代である。所で日本の現在、本はどんな姿をしているか。改めていうまでもないが、一応は述べなければならぬことだ。日本はその過去の本に於ては、西洋本と甚だ異なる綴本装幀をもっている。巻物形式までは略同様であつたが、綴本形式になつてからはまるで変つた形式となつた。即ち袋綴じであつて、截口が綴る方にある、西洋の逆態である。西洋と東洋とは、いろいろなものが逆であるが、本もその例を如実に示している。表紙を本文に綴じ合せる方法は西洋では早く姿を没したが、日本ではそれが、洋風装本の渡来までそのまま存続していた。チョン髻と同様である。この和風綴本、これは現在もむろん存在する。数から云つても、教科書類のこの方式のものを加えたら、相当な量であろう、が一般公刊本にあつては極めて少数がそれであるのみである。そして本の綴装といえ、殆ど大部分の人